

第五章

第四節 罪の中にも及ぶ神の摂理

はじめに

ここまで私たちは、神が世界を保ち、第二原因を用いながら歴史を導いておられることを学びました。しかし、ここで誰もが一つの疑問を抱きます。「では、人間の罪も神の摂理の中にあるのでしょうか」。もしそうであるなら、神が罪を造られたことになるのでしょうか。これは古くから教会が問い続けてきた難問です。ウェストミンスター信仰告白は、この問いを避けません。しかし同時に、極めて慎重に言葉を選びながら答えています。

一 神は罪をも支配される

第四節はまず、驚くべきことを語ります。人間の罪でさえ、神の摂理の外にはありません。つまり、罪は神の支配を破って勝手に生じた力ではないということです。もちろん、これは「神が罪を喜ばれる」という意味ではありません。そうではなく、罪がどれほど深刻であっても、それが神の主権を打ち破ることはできないという意味です。もし神の支配の及ばない領域があるなら、神は全能の主ではなくなってしまうです。聖書はそのようには語りません。神は罪をも含めて歴史全体を治め、最後には御自身の義と救いを完成されます。

二 ダビデの人口調査

その一つの実例が、ダビデの人口調査です。サムエル記下二十四章では、主がダビデを促して人口を数えさせたように記されています。一方、歴代誌上二十一章では、**サタンがダビデをそそのかした**と記されています。一見すると、二つの記事は矛盾しているようにも見えます。しかし、ウェストミンスター信仰告白は、ここに摂理の深さを見ます。サタンは、自らの悪意によって誘惑しました。ダビデも、自らの高慢によってその誘惑に従いました。その責任は、サタンとダビデ自身にあります。しかし、その出来事全体は、神の裁きと憐れみの御計画の中に置かれていました。つまり、一つの出来事には複数の次元があります。人間の側には自由な選択があります。サタンには悪意があります。しかし、そのさらに深いところで、神は歴史を支配しておられます。

三 神は罪の創始者ではない

ここで最も大切な一線が引かれます。**神は罪の創始者ではありません**。これはウェストミンスター信仰告白が繰り返し強調していることです。神は聖なるお方です。神から出るものは

善であり、義であり、真実です。ですから、神は人間に罪を犯すよう命じたり、悪へ誘惑したりすることはありません。人間は、自らの欲望に従って罪を犯します。ヤコブの手紙一章十三節も、「神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです」と明確に語っています。改革派神学は、神の主権を強調します。しかし、そのことによって神を罪の原因とすることは決してありません。この均衡を失うなら、摂理の教理そのものが崩れてしまいます。

四 サタンを恐れる必要はない

サタンもまた神の摂理の外にはいません。その自由は、人間の自由と同じように、神が許される範囲を超えることはできません。だから私たちは、サタンを恐れる必要はありません。恐れるべきお方は、天地を創造し、歴史を治めておられる神です。これは決して、サタンの働きを軽く見るという意味ではありません。聖書は、悪魔の誘惑に警戒するよう教えています。しかし、その悪魔もまた、神に対抗する第二の神ではありません。神の主権に服する被造物にすぎません。このことは、苦難の中にある信仰者にとって大きな慰めです。私たちがどのような試練に直面するときも、その出来事は神の御手からこぼれ落ちてはいません。

四節の結び

第五章第四節は、摂理論の中でも最も繊細な主題を扱っています。神は歴史全体を支配しておられます。罪もまた、その支配の外にはありません。しかし同時に、神は決して罪の創始者ではありません。罪は人間と悪しき者の責任であり、神はその罪さえも最終的には御自身の義と救いのために用いられます。この教えは、論理だけで完全に解き明かせるものではありません。むしろ聖書全体が証ししている神の聖さと主権、その両方を信仰によって受け止めるところに成り立っています。だから教会は、神の主権を告白すると同時に、人間に悔い改めを呼びかけ続けるのです。

第五節 父なる神の訓練としての試練

次は第五節です。ここでは、信仰者が経験する苦しみや試練を、神はどのような目的をもって用いられるのかが語られます。この節は、苦しみの意味を説明するというよりも、苦しみの中で信仰者がどのように神を信頼して歩むのかを教える箇所です。

一 神は御自分の子らを訓練される

聖書は、神が愛する者を訓練されると教えています。ヘブライ人への手紙十二章六節には、「なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである」とあります。ここでいう「鍛える」とは、罰を与えるという意味ではありません。親が子どもの成長を願って教え導くように、神もまた御自分の子らを育ててくださいます。神の目的は、私たちが打ち倒すことではありません。私たちを成熟した信仰者へと育てることです。

二 試練は信仰を映し出す鏡

私たちは順調なとき、自分の信仰は堅いと思いがちです。しかし、本当に自分の心が見えてくるのは、苦しみや試練の中です。思いどおりにならない出来事に出会ったとき、私たちは何に拠り頼んでいたのかが明らかになります。自分の力でしょうか。財産でしょうか。健康でしょうか。それとも神でしょうか。試練は、神が私たちを見抜くためのものではありません。神は初めから私たちをご存じです。むしろ、**私たち自身が自分の弱さを知り、神へ立ち返るために**用いられることがあります。その意味で、試練は信仰を壊すものではなく、信仰を深めるための器となることがあります。

三 神は高慢を碎かれる

聖書には、神が御自分の民の高慢を取り除かれる場面が何度も描かれています。イスラエルの民は、豊かになると神を忘れ、自分たちの力によって生きていると思い始めました。そのたびに神は、彼らを悔い改めへと導かれました。私たちも同じです。順調な日々は感謝すべきものですが、知らず知らずのうちに、自分の力を信賴するようになってしまうことがあります。試練は、そのような私たちを神へと立ち返らせる恵みの機会となることがあります。もちろん、その渦中にあるときには、その意味を理解することは容易ではありません。しかし、後になって振り返ると、「あの出来事を通して神は私を導いてくださった」と気づくことがあります。

四 試練の意味はすぐには分からない

ここで大切なのは、**すべての苦しみに、ただちに特定の理由を結び付けない**ことです。病気になったから、必ず何か特定の罪への罰だ、ということではありません。災害に遭ったから、神がその人だけを裁かれたということでもありません。主イエスも、シロアムの塔が倒れて亡くなった人々について、そのような理解を退けられました。また、生まれつき目の見えなかった人についても、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」と言われました。聖書は、苦しみを単純な因果関係では説明しません。しかし一つだけ確かなこ

とがあります。神は、信仰者が経験する試練を無意味なものとして放置されることはありません。私たちには理解できなくても、その歩みを神は御手の中で支えておられます。

五 神は私たちを見捨てられない

試練の中にいるとき、私たちはしばしばこう考えます。「神は私を見捨てられたのではないか」「祈っても答えがない」「神は遠くへ行ってしまうわれた」。詩編にも、そのような叫びが数多く記されています。しかし聖書は、そのような叫びを否定してはいません。むしろ、その叫びを神の前に率直に差し出すよう教えています。そして同時に、一つの約束を繰り返します。**神は御自分の民を決してお見捨てにならない**。私たちが神の御顔を見ることができなくなることはあっても、神が私たちから御顔を永遠に背けられることはありません。神は契約に忠実なお方だからです。

六 ヨブが学んだこと

ヨブほど深い苦しみを経験した人物は、聖書の中でも多くありません。財産を失い、子どもたちを失い、健康を失い、友人たちからも誤解されました。ヨブ自身も、「なぜですか」と神に問い続けます。しかし神は、ヨブに苦しみの理由を細かく説明されませんでした。代わりに、ご自身が天地を創造し、今も万物を支えておられることを示されました。ヨブはすべてを理解したわけではありません。しかし、神を新たに知りました。それゆえ最後には、ヨブ記四十二章五節で「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」と告白します。苦しみがすべて理解できたからではありません。苦しみの中でも神が生きておられることを知ったからです。

七 ペトロの手紙が語る希望

ペトロもまた、試練について語っています。「あなたがたの信仰は、火で精錬される金よりも尊い」。金は火によって不純物が取り除かれます。同じように、信仰も試練を通して鍛えられます。もちろん、火の中にいる金は、自分が精錬されていることを知りません。ただ熱く、苦しいだけです。私たちも同じです。試練の最中には、その意味が分からないことがほとんどでしょう。しかし神は、その試練を無意味な苦しみとして放置されることはありません。父が子を育てるように、神は私たちをキリストに似た者へと造り変えてくださいます。

八 キリストが共に苦しまれる

そして、キリスト者にとって最も大きな慰めはここに 있습니다。私たちが苦しみを経験するとき、主イエスは、その苦しみを知らないお方ではありません。主は裏切られ、誤解され、

見捨てられ、十字架の苦しみを味わわれました。だからこそ、私たちの苦しみに深く共感することがおできになります。ヘブライ人への手紙は、キリストは私たちの弱さに同情できない大祭司ではない、と語ります。神は苦しみを遠くから眺めておられるのではありません。御子ご自身が苦しみを担われました。だから信仰者は、どのような試練の中にあっても、一人ではありません。復活の主が共にいてくださいます。

第五節の結び

第五章第五節は、試練を説明するための教理ではありません。試練の中で神を信頼し続けるための教理です。私たちは苦しみの理由をすべて理解することはできません。しかし、苦しみの中でも神が父であることは変わりません。神は御自分の子らを見捨てるために試練をお与えになるのではなく、より深い信頼へ、より成熟した信仰へ、そしてキリストに似た者へと導くために、その歩みを支えてくださいます。だから私たちは、涙を流しながらでも祈ることができます。「父よ、あなたの御手に私をお委ねします」。この祈りは、主イエスご自身が十字架の上で祈られた祈りでもありました。摂理を信じるとは、人生のすべてが理解できるということではありません。**理解できない出来事の中でも、父なる神の御手を信頼し続けることです。**それが、この第五節が私たちに教えている信仰なのです。

第六節 神の義なる裁きもまた摂理である

第五章も終盤に入りました。ここまで学んできたように、神の摂理は世界全体を支え、信仰者を訓練し、歴史を導く神の御業です。しかし、摂理は神の恵みだけを意味するものではありません。今日学ぶ第六節では、**神の義なる裁きもまた摂理の中にある**ことが語られます。この教えは、現代の私たちには少し受け入れにくく感じられるかもしれません。私たちは神を愛の神として語ることに慣れていますが、しかし聖書は、神は愛であると同時に、義なる審判者でもあると証ししています。摂理とは、この二つを切り離さない教理なのです。

一 神は悪を放置されない

この世界を見ると、悪が勝っているように思えることがあります。暴力が支配し、権力者が人々を苦しめ、真実が踏みにじられる。そのような現実に出会うと、「神は本当に働いておられるのだろうか」と問いたくなります。しかし聖書は、悪は決して神の支配の外で勝手に広がっているのではないと教えます。神は忍耐深く人を悔い改めへ招かれます。けれども、その招きを繰り返し退けるならば、神は裁きをもって応えられることがあります。その裁きもまた、神の摂理の一部です。

二 「引き渡される」という裁き

ローマ書第一章には、繰り返し印象的な言葉が現れます。「**神は彼らをその欲望に引き渡された**」。これは、神が人間に新しい悪を与えられたという意味ではありません。そうではなく、人間が自ら選び続けた道を、そのまま歩ませるという裁きです。神は、なお立ち返るように呼びかけておられました。しかし、その声を聞こうとしないなら、人は自らの欲望の奴隷となっていくます。この「引き渡す」という裁きは、とても厳しい裁きです。なぜなら、それは神が御自身の恵みを取り去られることだからです。聖書は、神の裁きとは単に罰を与えることではなく、神から離れた人間が、自ら選んだ道の結果を刈り取ることでないと教えています。

三 頑なな心

聖書には、「神がファラオの心を頑なにされた」と記されています。しかし同じ出エジプト記では、「ファラオ自身が心を頑なにした」とも書かれています。この二つは矛盾ではありません。ファラオは、自分の意思で神に逆らいました。その責任はファラオ自身にあります。しかし、その頑なさが裁きとして固定されていくことも、神の義の現れでした。同じように、人は繰り返し神を拒み続けるなら、その拒絶がますます深まっていくことがあります。それは、神が人を悪へと導かれるからではありません。神の光を拒み続けた結果として、闇がよいよ深くなるのです。

四 教会への警告

ここで私たちは、一つの誤解を避けなければなりません。この節を読むと、「これは神を信じない人たちへの言葉だ」と考えてしまいがちです。しかし、聖書が繰り返し語っているのは、**神の裁きはまず神の民に向けられる**という事実です。旧約聖書で厳しい預言を受けたのは、異邦人だけではありませんでした。むしろイスラエルこそ、繰り返し預言者によって悔い改めを求められました。新約でも、教会は決して安全地帯ではありません。教会もまた、御言葉を軽んじ、福音よりも世の価値観を選び続けるなら、神の裁きを受けることがあります。だから教会は、歴史の中で絶えず改革され続けなければなりません。宗教改革者たちが語った「改革された教会は、常に改革され続ける教会である」という言葉は、この点をよく表しています。

五 神の裁きは教会にも及ぶ

神の義なる裁きは、教会の外にいる人々だけに向けられるものではありません。預言者たちが最も厳しく語った相手は、異邦の国々よりも、神の契約の民イスラエルでした。神は御自

分の民を愛しておられるからこそ、その罪を見過ごされません。愛は罪を放置することではなく、悔い改めと回復へ導くことだからです。

六 真理を拒み続ける危険

第六節は、人が繰り返し神の恵みを拒み続けるなら、ついには真理が見えなくなることがあると教えています。これは、神が最初から人を滅ぼそうとしておられるという意味ではありません。むしろ逆です。神は忍耐をもって語りかけ、悔い改めを待ち続けておられます。しかし、その呼びかけを退け続けるなら、人の心は次第に頑なになっていきます。やがて、自分では正しいと思っていることが、実は神に逆らう道となっていて、それに気づけなくなってしまうのです。これこそが、最も恐るべき裁きです。

七 教会も例外ではない

この警告は、今日の教会にも向けられています。教会だから、自動的に健全であり続けるわけではありません。歴史を振り返れば、教会が権力と結びつき、福音よりも自らの利益を優先し、世の価値観に迎合してしまった時代がありました。そのような時代にも、神は教会を見捨てられたものではありません。むしろ、裁きを通して教会を清め、新しくされました。宗教改革も、そのような神の摂理の一つとして理解することができます。人間の目には教会の危機に見えた出来事が、神の御手の中では御言葉を回復する時となりました。ですから、私たちは歴史の成功を誇ることも、失敗だけを見て絶望することもあります。神は御自分の教会を、裁きながらも守り続けてくださるからです。

八 私たち自身への問い

この節を学ぶとき、大切なのは「誰が邪悪なのか」と他人を裁くことではありません。むしろ、自分自身が神の御声に耳を傾けているかを問い直すことです。私たちは御言葉を聞いているでしょうか。悔い改めへと招かれているとき、その招きを受け入れているでしょうか。あるいは、自分は正しいと思い込み、神の語りかけに心を閉ざしてはいないでしょうか。教会は、絶えず御言葉によって吟味される共同体です。だからこそ、私たちは礼拝ごとに聖書を読み、罪を告白し、赦しを聞きます。神は私たちを滅ぼすためではなく、生かすために御言葉を与えてくださるからです。

第六節の結び

第六節は、一見すると厳しい教えです。しかし、その厳しさは神の愛の裏返しでもあります。神は悪を善として放置されません。神は御自分の民を見放すこともなさいません。だからこ

そ、必要なときには裁き、戒め、悔い改めへと招かれます。その意味で、神の裁きもまた救いの御業に仕える摂理です。私たちは、この教えを他人への非難としてではなく、自分自身への呼びかけとして受け止めたいと思います。教会は、過去に一度改革されたから安心なのではありません。御言葉によって絶えず新たにされ続ける共同体です。だから私たちは、「試みに遭わせず、悪より救い出したまえ」と祈りながら歩みます。この祈りは、自分の力への信頼ではなく、摂理の神への信頼から生まれる祈りなのです。

第七節「万事を教会の益となるように整えられる神」

第五章最後の節に入ります。ここまで私たちは、神の摂理について様々な角度から学んできました。神は宇宙を保持し、歴史を導き、人間の自由な行為をも御手の内に置いておられます。罪や苦難さえも、神の支配の外にはありません。しかし、もし第五章がそこで終わるなら、摂理はどこか冷たい教理として受け取られてしまうかもしれません。そこで最後に信仰告白は、私たちに最も大きな慰めを語ります。**神は万事を、御自分の教会の益となるように整えておられる。**これが摂理の最終的な目的です。

一 神は人格をもって愛してくださる

ここで大切なのは、神は単なる宇宙の法則ではないということです。もし神が抽象的な力であるなら、世界は秩序よく動いていても、私たち一人ひとりとは関わりがありません。しかし聖書が証しする神は違います。神はアブラハムと契約を結ばれました。イスラエルを御自分の民として選ばれました。そして、御子イエス・キリストによって、新しい契約を結び、教会を御自分の民としてくださいました。神は人格をもって私たちを愛し、契約の中で私たちを導かれるお方です。だから摂理とは、宇宙を管理する力ではなく、**父なる神が御自分の子らを導く愛の御業**なのです。

二 「万事が益となる」とは

この節の背景には、ローマの信徒への手紙第八章二十八節があります。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働く」。この御言葉は、しばしば誤解されます。「信仰を持てば、すべてがうまくいく」。そのような約束ではありません。実際、パウロ自身は迫害を受け、投獄され、苦難の連続を歩みました。それでも彼は「万事が益となる」と語ります。ここでいう「益」とは、神が私たちをキリストに似た者へと造り変え、終わりの日の救いへ導いてくださるということです。ですから、苦し

みそのものが良いものになるという意味ではありません。しかし神は、その苦しみさえも無駄にはされません。御自身の愛の御計画の中で用いてくださるのです。

三 歴史も教会のために用いられる

このことは教会の歴史にも見ることができます。教会は決して順風満帆ではありませんでした。迫害を受け、分裂を経験し、腐敗した時代もありました。しかし神は、そのような歴史の中でも教会を見捨てられませんでした。たとえば宗教改革は、中世教会の深い混乱の中から起こされました。人間の目には教会の危機でした。しかし神は、その危機を通して御言葉の權威を改めて明らかにされました。私たちは歴史の途中にいますから、その時々には神の御計画を理解できません。しかし後になって振り返ると、神が教会を導いておられたことに気づかされることがあります。

四 信仰によって受け取る慰め

だから、「万事が益となる」ということは、目で見えて証明できる事柄ではありません。**信仰によって受け取る約束**です。私たちには理解できない出来事があります。なぜ病があるのか。なぜ戦争があるのか。なぜ愛する人との別れがあるのか。その問いのすべてに、この地上で答えが与えられるわけではありません。しかし、私たちは一つのことを知っています。十字架で御子を惜しまれなかった神は、決して御自分の教会を見捨てられないということです。だから理解よりも先に、神への信頼があります。それが摂理を信じるということです。

第七節の結び

第五章は、「神の摂理」という壮大な主題を学んできました。神は天地を創造されました。その創造を今日も支えておられます。歴史を導き、罪をも支配し、試練を通して御自分の子らを鍛え、義をもって悪を裁かれます。しかし、そのすべては冷たい運命ではありません。父なる神の愛の御手です。だから信仰者は、人生のどのような出来事の中でも希望を失いません。たとえ今は意味が分からなくても、神は御自分の教会を愛しておられます。そして、御子イエス・キリストにあって、**万事を教会の益となるように整えておられます**。これが、ウェストミンスター信仰告白第五章が私たちに伝えようとしている最後の福音です。

第五章全体の締めくくり

第五章を読み終えると、ウェストミンスター信仰告白が語る「摂理」は、決して抽象的な哲学ではないことが分かります。それは、**契約の神**への信頼の告白です。世界は偶然に支配さ

れているわけではありません。運命に支配されているのでもありません。父・子・聖霊なる神が、キリストにある救いを完成するために、歴史を導いておられます。その神は、私たち一人ひとりの歩みをも御存じです。だから私たちは、将来への不安に支配されるのではなく、今日も神に信頼して歩むことができます。「あなたの御手に、わたしの霊をゆだねます」。この祈りは、主イエスが十字架の上で祈られた祈りであり、また摂理を信じる教会の祈りでもあります。